

令和5年度 豊橋技術科学大学第三年次入学者選抜学力検査問題

一般科目（国語）

注意事項

- 一 試験開始の合図まで、この問題冊子と解答用紙を開いてはいけません。
- 二 問題冊子の枚数は、表紙、草稿用紙を含めて二十三枚です。解答用紙は六枚あります。
- 三 問題は大問が四問あります。全問解答してください。
- 四 解答にかかる前に、すべての解答用紙の所定の箇所に受験番号を記入してください。
- 五 解答は必ず解答用紙の所定の欄に記入してください。所定の欄以外に記入した解答は無効です。
- 六 解答は楷書で正確に書いてください。判読に迷うものは不正解となる場合があります。また、選択肢の解答に際して、カタカナをひらがなに変更するなど、次のような改変は不正解となります。
(例) ア ↓ あ A ↓ a
- 七 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあれば、ただちに申し出てください。
- 八 問題冊子の余白は、草稿用として使用しても構いません。
- 九 試験終了時刻まで退出してはいけません。
- 十 問題冊子は持ち帰ってください。

(草稿用紙)

〔二〕 次の本文【A】と本文【B】は、いずれも俳優・中山千夏（一九四八年～）の自伝的小説「子役の時間」の一節である。

主人公で十一歳の「子供」は、子役俳優としてテレビ等で活躍し、一九五九年に仕事のため大阪から東京の小学校に転校した。

本文【A】は転校後の東京の小学校における「子供」と同級生たちの会話の場面であり、本文【B】は本文【A】の内容から続いて「子供」が転校前の大阪の小学校時代を回想している場面を中心としている。

本文【A】を読み、その内容をふまえた上で、本文【B】についての問いに答えよ。

本文【A】

体操の時間に、女子の番を待って、男の子たちのマラソンを見学していた時だ。誰を応援しようかな、みんなの気をひくように呉服屋のメグミが言い出した。すぐにクリーニング店のジュンコが、あら、あなたはスギモト君に決まってるんですよ、とからかい口調で応答し、わあ、それはミツちゃんよ、ねえ、とメグミが笑ってミチコをひじで突く真似をした。料理屋のミチコは、黙したままニヤニヤしながら、横に立っていた子供の腕に自分の腕をまわした。

女同士のなれあつた雰囲気は、幼い者たちの間にもすぐ芽生え、それですつかり打ちとけた気分になつた子供が、あたしアラタ君が好き、アラタ君ガンバレ、と彼女たちだけに聞こえるくらいな声をあげた時、それは起こつた。

太つて丸いメグミの顔が、肩越しに振り返る。腕をからませているミチコのおとなびた顔が、こちらを向く。そのむこうから、念入りに髪を撫でつけたジュンコの顔がのぞく。

（中略）

あの時、同級生たちの顔には、はつきりと何かの表情が浮かんでいたが、子供にとつて、それは不可解な仮面であつた。

（中略）

突然、子供の胸の中で、何かがぼつと燃えあがり、たちまちのうちに体の四方八方へと熱を伝えた。あの時押し切られた違和感が勢い良く起きあがって、内側から子供を揺

さぶつた。体を固くして熱の波に耐えながら、子供はあの一瞬の意味を悟つた。単純なことだつた。溶け込もうとする子供を、彼女たちは拒否したのだ。当然あるべきからかいや囁し言葉のかわりに、不可解な仮面を見せることで、彼女たちは拒否したのだ。あなたは、私たちとは違うのに、同じ振りをするなんて、と仮面はささやきあつていた。

本文【B】

子供が初めてテレビに出たのは二年余り前、大阪の民放テレビが開局して間もない頃であつた。子役を求めていたテレビ局の人間と、子供の両親が㊸コソイコソイにしていた人間とが、たまたま親しかつた、というだけがきっかけだつた。

ほとんど冗談のようにやってみたテレビ出演は、ディレクターやプロデューサーの興味をひき、次の出演のきっかけになつた。次の出演は、またその次の出演のきっかけになり、一年もたつと子供は、ミヤコ蝶々、南都雄二、花菱アチャコ、西条凡児、といった大御所や、森光子、藤田まこと、佐々十郎、大村昆、(注1)といった若手の売れっ子たちに混まじつて、テレビ局を駆け巡つていた。

世間での注目を集めるにつれて、子供は学校でも目立たないわけにはゆかなくなつた。早退、遅刻、休校が多いという点で、あるいは、受像機(注2)を買うのさえ贅沢なテレビに、出演などしている、という点で。

①教師や父兄の大方は、そんな子供を不快に思い、それは子供たちにも伝わつた。

ことに小さな鉄工所のひとり娘は、腹にすえかねていて、立派な体格と体育優秀の自信を持つて女の子たちをとりまとめ、ある日、昼休みのドッジ・ボールから、子供を㊹あからさまに締め出した。

子供たちの作法どおり、入れて、と声をかけて遊びに加わろうとした子供の前に立ちはだかると、鉄工所のひとり娘は㊺きつぱり拒否したものだ。

「あかん。入れたらへん」

なんでやのん、と㊻ロウバイロウバイするのを半眼に見降して、

「あんた、テレビなんか出てなまいきや。うちら、あんたと遊ばんことにしたわ」

そう言い捨てると、成り行きをうかがっていた女の子たちのなかへ戻り、さあ、いくで、と機敏に体を動かし始めた。女の子たちは即座に応じ、何人かがきまりの悪い顔つきで、子供の視線を避けた。子供は、A。同級生の女の子ほとんど全てが、

ドッジ・ボールの四角いコートのなかで動きまわっていた。②しかし、コートから出て子供に近付こうとする者は、ひとりもいなかった。誰かの運動靴のつま先で引かれたコートラインが、いつか本で読んだ魔方陣の線になって、女の子たちを囲い込み、子供の侵入を阻んでいた。しばらくたって、

「③ふうん、そうか」

と子供は呟いた。呟いてから、後に続く言葉が何も無いのに気がつく、子供はゆつくりきびすをかえし、ぶらぶら歩いて人気ひとけの無い校舎の裏手まで行つて、そこで、短い時間、泣けるだけ泣いた。泣き止んでからも始業ベルが鳴るまでは、校舎の壁に寄りかかり、舌で歯の裏をなぞりながら、ひとり④つくねんとしていた。

④子供はこの顛末てんまつを誰にも訴えはしなかった。両親にすら話さなかった。口惜しくはあつても、仲間から外されるのは当然なのだ、という気がした。だからといって、テレビをやめる気は毛頭なかった。子供はもはや、演ずることの魅力にとりつかれていたのだ。むしろ、学校ならやめてもよかったが、両親が許す見込みはない。つまり、この顛末を話したところで、何がどうなるものでもないのだ。演ずること、他の子供たちには想像もつかないこの⑤カンキを、自分は知っている、その微かな優越感が、子供の沈黙を支えた。

この事件があつて後、子供は以前と変わりなく暮らしているように見えた。級友たちの仲間外れも常時続いたわけではない。鉄工所のひとり娘だけは、ことあるごとに挑戦的な態度をとつたが、他の者は、日によつて時によつていろいろだった。かえつて子供に同情を寄せ、以前より親しくしようとする者もいた。そろそろ女の子を避ける年頃の男の子たちは、こんな様子を横目に見て、

B

全く子供は、以前とほとんど変わりなかった。遊びに加わる時の⑥ムジャキも、教室での快活も、挑戦をはねかえす勝気も、従来からのものであつた。ただ、子供は、自分から人を誘うことがなくなつた。遊ぼう、と言われれば遊ぶし、帰ろう、と誘われれば肩を並べて帰る。しかし、自分からは声をかけない。⑤そして、子供たちが仲間に加わる際の、入れて、という合言葉を、決して口にしなくなつた。

頭に焼きついたドッジ・ボールのコートのラインが、それを押さえた。級友たちがどれほど親し気に見える時でも、子供は自分と相手との間に、運動靴のつま先で引かれたあのラインの存在を感じた。級友たちは、何かの拍子にきつとまた、ラインの内側へ逃げ込んでしまう小鬼なのだ。⑦厳然とあらわれた魔方陣に阻まれて、

C

子供は、忘れられないコートラインをなおさら忘れず、いつも級友たちとの間に見すえて、自分から踏み込まないよう、細心の注意を払つた。自分から、入れて、と踏み込

んだとたんに、魔方阵があらわになり、その存在に気付いた級友たちが、線のなかへ逃げ込むのではないか、と恐れたのだ。

こうして学校も級友たちも、子供にとって外界になった。そんな矢先だったから、有名な劇作家の熱心な誘いを受けると、戸惑い顔の両親とは対照的に、子供は④いそいそと東京へ向かった。いい舞台上演することに較べれば、転校などごく小さな問題だった。不安がなくなかったが、どう変わろうと学校や級友は、たかだか外界のひとつに過ぎず、いつでも自分から切り離すことのできる外界に対して、子供は愛着を感じなかった。

しかし今、劇場街へ向かって歩く子供は、⑥前の級友たちのあからさまな拒否を、無性になつかしく思い出していた。この拒否は、子供を泣かせたが、新しい級友たちの優雅な拒否は、子供を恥ずかしい気持ちにさせた。哀しさや口惜しさなら泣いて埋めあわせることもできる。だが、恥ずかしさは、D。

「⑦しまった、しまった、しまったね」

鎮まっていた恥ずかしさが、再び波立とうとする気配を感じた子供は、勢い良く足を踏み出しながら、そう呟いた。腰の上で教材が調子のついた音を立てた。⑧波立ちは起こらず、いくつもの学校での情景と共に、素早く背後へ退いていった。そして、劇場街の映画館から流れ出す聞き慣れた映画音楽が、残りの感覚を追い払い、次の角を曲がったところに広がる劇場街のありさまを、E。

中山千夏 『子役の時間』(文春文庫 一九八三年)より

注1 一九五〇年代後半から六〇年代にかけて活躍した実在の日本の芸能人・俳優たちの名前。

注2 現在「テレビ」と呼ばれている機器のことを、当時は「受像機」と呼んでいた。「受像機」の普及率(所有率)は一九六〇年頃で五割弱だった。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字にした際、その単語に含まれる漢字として最も適

切なものをア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

① コンイ

ア 懇 イ 異 ウ 献 エ 居 オ 近

② ロウバイ

ア 這 イ 狼 ウ 培 エ 労 オ 慌

③ カンキ

ア 気 イ 期 ウ 感 エ 歓 オ 観

④ ムジャキ

ア 喜 イ 蛇 ウ 夢 エ 気 オ 武

問二 傍線部㉠㉡の単語の使い方として最も適切なものを、それぞれア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

㉠ あからさまに

- ア 彼が嘘をついていることが会場の全ての人々に対しあからさまになった。
イ 面倒くさいとは言えないので、忙しいという理由で飲み会をあからさまに断ることにした。
ウ きらいな食べ物を出されても、あからさまにいやな表情をしてはいけない。
エ 誰になんと言われようと私は自分の生き方をあからさまに貫いていくつもりだ。
オ 彼の態度は多くの人々の心をあからさまに打った。

㉡ きつぱり

- ア 彼はきつぱりとした性格なので、時々面倒な人間だと誤解される。
イ あまりにもきつぱりと間違えているので、誰も注意できなかった。
ウ 誰に対してもきつぱりと意見をいえるようになりたい。
エ 毎日きつぱりとしたスーツを着ていると堅苦しくなる。
オ 昨日見た夢は、妙にきつぱりとしていた。

㉢ つくねんと

- ア 回答に迷うとつくねんとしてしまう性格は直した方がいい。
イ 試験に落ちてつくねんとしている弟に、かける言葉が見つからなかった。
ウ 彼がつくねんとかんばっている様子は、周りの部員にも影響を与えた。
エ 私が公園でつくねんとしていると、いつも彼女が声をかけてくれた。
オ あの子はいつもつくねんとしていて、見ていてうらやましくなる。

㊦ 厳然と

- ア 母は厳然と怒りだして私を怒鳴りつけた。
- イ 小論文が厳然と添削されて返却されてきた。
- ウ 彼女は興奮すると歩き方が厳然となる癖がある。
- エ 先生の厳然とした話し方は近寄りがたいが信頼感がある。
- オ あの政治家はたいそう厳然としていて、よく意見を変える。

㊧ いそいそと

- ア 父が怒気を含んで居間に入ってきたので、見つからないようにいそいそと部屋を出た。
- イ 答えに自信がないので、いそいそとテストを提出した。
- ウ 予約していたゲームが入荷したと連絡があったので、いそいそと出かける用意をした。
- エ 秘密がばれないように、いそいそと行動する必要がある。
- オ そろそろ寝ようと思ったところを嫌な仕事でよびだされ、いそいそと家を出た。

問三

A E に当てはまる最も適切な文章を、ア～オの中から一つずつ

つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

- ア いちはやく子供に運んできた
- イ どうにも手の打ちようがない
- ウ 知らん顔で過ごしていた
- エ ぼかんとして立っていた
- オ ぼんやり取り残されるのはもう嫌だった

問四

傍線部①で、「子供」の学校の教師や父兄が「子供」のことを不快に思ったのはなぜか、その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分が目立つ存在であるにもかかわらず、普通の児童や家庭と同じように扱って欲しいという態度が見て取れ、傲慢に感じるから。
 イ 芸能人であるから特別扱いされることに慣れていき、周りの配慮に対する感謝がなくなってきたから。

ウ 芸能界で働くことで大人びてしまい、周りの他の子供たちに悪い影響を与えかねないことを心配し始めたから。

エ テレビを買うことさえ贅沢であるのに、そのテレビに出ている、金持ちであることと特権的な立場であることを自慢されるような惨めな気持になるから。
 オ テレビに出ているということ笠に着て、欠席や遅刻、早退をすることを悪いと思っていないような態度でいるように見えるのが気に入らないから。

問五

傍線部②で、「子供に近付こうとする者は、ひとりもいなかった」のはなぜか、その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 学校のルールを守らない「子供」が気が向いたときだけ遊びに参加するのを排除するのは当然だと考えているため。

イ 小さな鉄工所のひとり娘に逆らって「子供」の味方をするほど親しいわけではなく、芸能人である「子供」が不快だという意識もあつたため。

ウ 「子供」を仲間はずれにするのは気まずいが、学校の秩序を守るためには「子供」に関わってはいけないと子供ながらに考えているため。

エ 学校にとって異質な存在となっていた「子供」を仲間として受け入れ続けることははやできないという雰囲気は児童の間にも広まっていたため。

オ 鉄工所のひとり娘と同じように、教師や親の影響で、「子供」のことをいじめてもかまわないと思う児童が増えていたから。

問六

傍線部③で、「子供」が「ふうん、そうか」と呟いたときの心情の説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア もうこの学校には自分の居場所はない、と興味を失った気持。
- イ 陰湿なやり方で自分を仲間はずれにした児童たちを馬鹿にする気持。
- ウ 遊びの仲間になぜ入れてもらえないのか分からず、呆然とする気持。
- エ 学校の友人たちが、こんなふうに自分を仲間はずれにするような連中だったのかとあきれた気持。
- オ 自分が学校の仲間とは見なされなくなったことに気づき、あきらめた気持。

問七

傍線部④で、「子供」が「この顛末を誰にも訴えはしなかった」のはなぜか、その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 芸能人である自分は、小学校中心の生活に戻るつもりはないので、自分を受け入れてほしいと望むのは無理だと考えたから。
- イ 大人達に同級生たちを注意してもらっても、仲間はずれやいじめが陰湿になるだけだと考えたから。
- ウ 教員や父兄に嫌われているので、同級生たちに仲間外れを注意するなどの十分な対応は期待できないと想ったから。
- エ 自分は悪くないので、助けを乞うような真似をするのはプライドが許さないと考えたから。
- オ 実際はこっそり自分を助けたり同情してくれる児童もいたので、大ごとにならないほうがいいと考えたから。

問八

傍線部⑤で、「子供」が「入れて」と口にしなくなったのはなぜか、その理由としても最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分は一人で生きる力がある、と仲間はずれにした同級生たちに見せつけたいから。
- イ 仲間に入れてほしいと頼んでも、同級生たちは自分のことを拒絶するに違いないと確信していたから。
- ウ 自分はもう、同じこの学校の仲間ではないのだ、ということをはっきり自覚したから。
- エ 蔭で助けてくれる友人もいるので、わずらわしいことはしたくなくなつたら。
- オ 人を仲間はずれにするような連中にお問い合わせするのはうんざりだと考えたから。

問九

傍線部⑥で、「子供」が「無性になつかしく思い出していた」のはなぜか、その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 大阪の同級生たちの拒否は自分を傷つけ、悲しませたが、東京の同級生たちの拒否は自分に恥をかかせることを目的としていて、陰湿で気持ち悪いと考えたから。
- イ 東京の同級生たちは自分と仲良くするようで、心の中では自分を仲間とは見なしていないのに比べ、大阪では自分を嫌う子、同情する子、付き合ってくれずの子がはつきりしていて、気楽だったから。
- ウ 友達の振りをしながら実は自分を拒否している東京の同級生たちの態度を見て、大阪の同級生たちのはつきりとした拒絶の方がわかりやすいし覚悟も決まるのですぐに気持ちの整理を付けることができたと考えたから。
- エ 東京の同級生たちが実は自分には心を許していないことを知り、生まれ育つた大阪の同級生たちの方がつきあいが長い分だけわかりやすくてよかつたと考えたから。
- オ 東京の人は冷たいと言われていることが、東京の同級生たちの態度からようやく理解できたので、地元の友人たちの方がずっとまじだと気がついたから。

問十 傍線部⑦で、「子供」が「しまった、しまった、しまったね」とつぶやいているのはなぜか、その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分は周りの子供たちとはちがうと覚悟していたはずなのに、表面的な親しさを友情と勘違いしてしまったことを悔しく思ったから。

イ 東京の同級生たちの対応に心を許してしまっただが、実は受け入れられていなかったことに気づき、素直な気持ちを話してしまったと恥ずかしくなったから。

ウ 恥をかかされたという悔しさを打ち消すために、東京の同級生たちとした会話は、自分のちよつとした失敗に過ぎないのだ、と自分に言い聞かせたかったから。

エ 東京の同級生たちの本心に気付かず心を開いてしまい、蔭で笑われているのではないかと不安に苛まれているから。

オ 東京の同級生たちは大阪と違って、常に距離を持って人と接しているということを体験し、その距離感を悲しく思っているから。

問十一 傍線部⑧は、「子供」のどのような心情を表現した文章か、その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア これから待っている仕事を楽しみなで、学校のことなどどうでも良くなつていく心情。

イ 子役として演技する時の気持を思い起こし、ざわつく気持を強引に静めていく心情。

ウ 学校のこととはもう忘れて、仕事に集中しようという子役意識を持ち始めていく心情。

エ 子役としての仕事場が近づくにつれて、自分の気持が学校から仕事に切り替わっていく心情。

オ 恥ずかしいという気持を、芸能人としてのプライドで押し込めていくという心情。

「二」 以下の文章を読んで、質問に答えよ。

まず最初に、「エネルギーとエコロジー」という、私に与えられたテーマについてであるが、エコロジーはともかく、エネルギーについて「現代思想」という枠組みのなかで考えることの意味に関して、多少の②ケントウが必要であろう。

A、①ここでのいうエネルギーは、純粹に物理的な量としてのそれではなく、人間との関係におけるエネルギー、言い換えれば天然資源に人間がテクノロジーを適用することによって何らかの仕事に利用可能なかたちで取り出しうるエネルギーのことである。 1

エネルギーないしその思想の歴史は、人間と技術の歴史と同じくらいに古いはずで、たとえば、エネルギーの供給と需要の問題は、いつの時代にあっても大きな関心事であったことだろう。

このように書くとき、②まず想起されるのは、ギリシアのプロメテウス神話である。その一般に最もよく知られたかたち、すなわち、プラトンの「プロタゴラス」(注)によれば、神々が初めて動物を創造したとき、エピメテウスがさまざまな能力を動物たちに配分する役を任せられた。彼は配分にあたっては、「ある種族には早さをあたえない代りに強さをさすけ、 B

力の弱いものたちには、早さをもつて装備させた。また、あるものには武器をあたえ、あるものには、生れつき武器をもたない種族とした代りに、 2 「ためにはまた別の能力を工夫してやることにした」。こうして各動物が等しく生きていけるようにと与えられたのが、「自然の本性」だった。

C、エピメテウスはあまり賢明ではなかったので、 3 うちにもろもろの能力を使い果たしてしまい、人間の番になったとき配分すべき能力がもう何も残っていないかった。「人間だけは、はだかのまま、履くものもなく、③シクものもなく、武器もあたえられずにいるではないか」。

そこで、これを見かねた智者プロメテウスが、人類を滅亡から防ぐために、ヘパイトス(鍛冶の神)とアテナから「技術的な智慧を火とともに盗み出して——というのは、火がなければ、誰も技術知を獲得したり有効に使用したりできないからである——そのうえでこれを人間に贈った」。

③「プロタゴラス」によれば、右のようにして「火を使うという神性」を④フヨされた人間たちは、獣の攻撃から身を守るために集結して国を作ったが、ポリスを形成してみると政治的な観知を欠いていたために、火と技術がかえって災いとなって互いに害しい、荒廃していく。

このようなプロメテウス神話は、人間社会と火(エネルギー)と技術知(テクノロジー)との

関係について、現代に通じるような④シ|サに富んでいる。人間が人間たりえたのは、「自然の本性」によつてではなく、「火を使うという神性」すなわち自らの自然の外なるものを与えられたからであり、いわば自然から異化することに出発点があつたということになる。D、その異化を可能にしたのが、エネルギーとテクノロジーであり、それらの性質が 4
 とになったというわけである。そこに、他の動物から際立つた人間の能力をみることができるが、同時に自然との間に基本的な緊張をかかえることになった④人間の原点もみることができ
 きる。

右にみたように、プロメテウス神話は、社会とエネルギーとテクノロジーの 5
 関係を言いあてているが、そこにすでに潜在的に認められる困難や矛盾、 E、⑤サイヤ
 クの予感といったものを、白日のもとに顕在化させたのが現代という時代の特徴であろう。そ
 して、そこに、⑤「現代思想」としてエネルギーを考えなければならぬといわれもあるであ
 る。

佐高信・中里英章編『高木仁三郎セレクション』(岩波現代文庫 二〇一二年)より

(注) プラトンの「プロタゴラス」とは、古代ギリシアの哲学者プラトン
 が師である哲学者ソクラテスの話を書き記した「対話篇」と呼ば
 れるテキストの一つ。ソクラテスがソフィスト(職業弁論家)で
 あつたプロタゴラスと語つた話がまとめられている。

問一 傍線部①～③のカタカナ部分を漢字にした際、その単語に含まれる漢字として最も適切なものを含む単語をア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

① ケントウ

ア 経験 イ 闘争 ウ 敵討 エ 所見 オ 当選

② シク

ア 敷設 イ 仕組 ウ 見識 エ 嘱望 オ 視界

③ フヨ

ア 予定 イ 余語 ウ 月賦 エ 負担 オ 不快

④ シサ

ア 指示 イ 査読 ウ 至上 エ 意図 オ 端緒

⑤ サイヤク

ア 違約 イ 最悪 ウ 学際 エ 端役 オ 厄介

問二

A

く

E

に当てはまるものとして最もふさわしいもの一つ選
び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

ア しかも イ さらには ウ 他方 エ ところが オ もちろん

問三

1 5 にあてはまるものとして最もふさわしいものを選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

- ア 身の保全の
- イ 人間社会を規定する
- ウ のつぴきならない
- エ うっかりしている
- オ このような意味における

問四

傍線部①について、「ここでいうエネルギー」とはどのようなもののことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 通常なら使い物にならないような物質だが、エネルギー源として利用することで、人間の新たなテクノロジーの一部になりうるようなもののこと。
- イ 自然そのままの状態では燃料などとして使うことはできないが、人間の技術によつて加工したりすることによつて人間にとつて有益に使用することが可能となるもののこと。
- ウ これまで無用なものだと考えられてきたが、人間の科学技術の進歩によつて、必要なエネルギーの発生源であることが新たにわかったようなもののこと。
- エ 人間にとつての需要に見合う形で、人類史数千年の歩みの中で探し出された、化石燃料を中心としたエネルギーのこと。
- オ 技術が発展すると共に必要とされるエネルギーの大きさも巨大化したが、そのような新たなエネルギーもまた、人類の進歩に合わせて様々な発展を遂げてきたものであるということ。

問五

傍線部②について、筆者がここで「プロメテウス神話」を「想起」しているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア プロメテウスは動物にさまざまな役割を配分する際に、人間に与える能力を残しておくことを忘れたが、こつそり盗み出して与えた能力が技術と知恵と火を扱うことだという点だが、人類の狡猾さを巧みに表現しているから。

イ プロメテウスはエピメテウスの仕事の失敗を知り、その失敗を隠蔽するために人間に他の動物や自然とは違った特別な能力である技術と火を与える選択をしたから。

ウ エピメテウスが愚かな神であったために、人間にはほかの動物のような身体能力や特性が与えられなかったことを見越して、プロメテウスは目論見通り人間に特別な技術的な能力を授けることができたから。

エ 人間が自然のままでは生きていけないことを発見したプロメテウスは、火と技術を人間に授けたが、このエピソードが人間とその他の動物や自然との間には火と技術を扱えるという点で大きな隔たりがあることを示しているから。

オ エピメテウスのミスから人間には何の能力も特性も与えられなかったため、プロメテウスは人類を滅亡させるわけにはいかず、技術と火を扱う力を与えたことによつて、人類が神に近づきすぎてしまったから。

問六

傍線部③について、筆者は「プロタゴラス」がこの神話から示そうとしている内容はどんなことだと考えているか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間はプロメテウスによつて技術や火といった動物や自然を超越した力が与えられたが、社会を平和的に営んでいく精神や知性に欠けていたため、その力を制御しきれず、お互いに奪い合ったり、殺し合ったりするような悲惨な状態になったということ。

イ 人間が政治的な活動に目覚めて国家を作り、さらに戦争までするようになったことに及び、人間社会が荒廃したのは、神によつて技術と火を扱う力が備えられた結果、人類の知性が後退したためであるということ。

ウ プロメテウスがエピメテウスの過失を補うために人間に技術力や火を扱う能力を授けたりなどしなければ、人間は余計な知性に目覚めることもなく、愚鈍でありながらも平和で安定した社会を形成し、生きていくことができたはずなのだと指摘すること。

エ 神から人間に与えられた技術と火という超越的な能力によつて、人間は地球を支配する立場となったが、その人間同士が殺し合い憎み合うことで発展するという凄惨な世界が生まれるきっかけにもなつてしまったということ。

オ 人類を滅亡から救うために神々によつて与えられたはずの技術と火という能力が、人類の発展とともに強大化し、また人間の精神にも影響を及ぼして、最終的には人類を滅ぼす手段となりつつあるという逆説を象徴しているということ。

問七

傍線部④について、ここでいう「人間の原点」とは何か。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア もともと技術や火を扱う能力とは縁がなかったはずの動物としての人間が偶然にもその能力を得たことで、突如として自然に対して優位に立った喜びと苦悩を一緒に抱えこんだ存在になってしまったということ。

イ 古代から神によつて与えられた能力で国家を創り、社会を運営する力を勝ち得たという強い自負とその傲慢さから発生する残虐性を併せ持つ存在になったということ。

ウ 人類は自分たちの叡知を神から与えられた特権として自然に相対してきたが、自然にとつて人間はその小さな一部でしかなく、二一世紀に入っても未だ自然を制御することもできない、精神のみが肥大した存在であることは変わっていないということ。

エ 人間は技術と火を扱う能力によつて、自然や動物から突出した存在になり得たが、実際にはその技術も火も十分にコントロールできておらず、未だに自然に押さえつけられているだけの存在でしかないということ。

オ 自然に手を加え、そこから自分たちに必要な力やものを引き出すという自然との不一致を、人間が最初から抱え込んでいたということ。

問八

傍線部⑤について、筆者は「現代思想」としてエネルギーを考えなければならぬ」としているが、筆者の意見を現在の状況に当てはめるならば、どのような意味になると考えられるか。本文全体をふまえ、その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間がこれまで発展させてきた技術力、科学力や、エネルギー問題への意識の中に、思想的な考察は含まれてこなかったため、開発や発展に国ごとの偏りや格差が発生することになった。技術を扱うためには思考力、考察力が重要であり、その重要性が認識されるようになったのが現在なのであるということ。

イ 人間社会が自然科学に次いで人文社会科学を発展させてきたことで、人間が技術や科学の暴走を食い止めようという営為がこれまでなされてきたことに加え、新たな思想によって自然災害や環境破壊を制御し、自分たちの生存圏を維持しつつ、よりよい発展を目指す必要があるということ。

ウ 人間が自然を操作することで様々な被害が古代から発生し続けてきたが、現在ではそれがエネルギー問題として人類存亡にも関わる大きな破局の危機として現れてしまい、エネルギーに関する問題を改めて人間の営みとして反省的にとらえ返す思想が求められていること。

エ 技術や科学の発展が人間社会に与えてきた負の遺産、環境汚染や自然破壊の問題はこれまで強力な権力によって隠蔽されてきたが、人文科学や社会科学といった思想的学問の発展と普及により言論の自由や民主的政体が普遍化することで、それらが明らかになってきたということ。

オ 現代思想は、近代世界が大きな戦争などでお互いが傷ついた結果、人類の平和な環境を守るために発展してきた人文知であるが、エネルギー問題もまた、人類の平和を守るという現代思想の方向性で使い方、利用方針を考えなければ、やはり人類は危機に向かつてしまうだろうということ。

〔三〕 次の(一)～(五)の単語の対義語となるように、ア～コ of 漢字を正しく組み合わせて単語を作り、記号を記入せよ。ただし、12、34、56、78、910のそれぞれが正しい対義語となっている場合のみ正解とする。

(一) 極端 ↓ 12

(二) 挫折 ↓ 34

(三) 直進 ↓ 56

(四) 干渉 ↓ 78

(五) 停滞 ↓ 910

ア	徹	イ	中	ウ	円	エ	静	オ	蛇
カ	行	キ	滑	ク	観	ケ	庸	コ	貫

〔四〕 次の(一)～(十)の文章の内容に当てはまるものとして最もふさわしい慣用句をア～コの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

(一) 男は万引きしたことについて「こんなことをするつもりはなかった、自分でもどうしてやったかわからない」と繰り返し返した。

(二) 取引先の信用を取り戻すには、部署の全員が考えを改める必要がある。

(三) 面接には、必ず「いつも心に太陽を」と自分に言い聞かせて臨むようにしている。

(四) 彼は仲間が途中で気を失ったり怪我をしたりしても全く気にもかけずに前進し続けた。

(五) 自分が本当に思ったこと、正直な感想をこれまで言ってきたつもりだ。

(六) 彼女は生徒に謝ることは教員としての自分の否定につながると思っていた。

(七) 老人は、壺が本物かどうか確かめるかのように、あらゆる角度から眺めた。

(八) 帝国建設と言えば、日本で知らない人など一人もない超有名企業だ。

(九) あの若い大統領候補は、どんな厳しい質問にも適切な回答を即座にできる。

(十) 僕には心から信頼できる友人が一人いて、昨日もずいぶん話し込んだ。

- | | | | | | |
|---|-----------------------------|---|---|---|------------------------|
| ア | 忌憚 <small>きたん</small> のない | イ | 人口 <small>かいしや</small> に膾炙 <small>かいしや</small> した | ウ | 座右の銘 |
| エ | 気が置けない | オ | 襟 <small>えり</small> を正す | カ | 立て板に水 |
| キ | ためつすがめつ | ク | 沽券 <small>こけん</small> に関わる | ケ | 魔 <small>ま</small> が差す |
| コ | 一顧 <small>いちこ</small> だにしない | | | | |